陸上運動の指導に関する研究 (Ⅱ) — 児童及び教師が認識する教材の好き嫌いと楽しい授業について —

秋 吉 嘉 範 (福岡教育大学)

A Study of Instruction in Track and Field (Ⅱ)

— Likes and dislikes in teaching materials and joyful
class that school childrens and teachers understand —

Yoshinori AKIYOSHI

Abstract

The purpose of this study is to investigate the method of the instruction for pupils to understand the joy of exercise.

Results.

(1) Pupils have likes and dislikes in Track and Field as follows:

1. Boys and girls like long jump most, and the next that they like is a relay and a short distance.

They like them because they can run fast, and can jump more and run in cooperation with others. On the other hand, some people dislike them because of their weakness. We can say that their likes and dislikes is concerned with their abilities and the cooperation.

2. It is most joyful for boys to practice long jump, and a relay is the next. Girls regard a relay as most joyful exercise and long jump is the next. They think so because they can develop their records, conquer the rivals, and cooperate with others. Both boys and girls don't think a short distance joyful because of their weakness.

3. Above these two are concerned with each other.

(2) On the instruction of Track and Field, teachers recognize as follows:

1. They make pupils do their best and cooperate with others, and they want to develop pupil's physical strength.

2. Teachers think that the joy of exercise is combined to the development of pupil's achievement.

3. Then we can say that;

a. it is pleasant for pupils to touch the characteristics of Track and Field, and that teachers attach importance to the physical strength.

b. pupils recognize Track and Field as a sport, while teachers recognize it as a teaching materials of school work.

c. it is important for teachers to make pupils experience the joy of exercise, developing the characteristics of Track and Field first. And then they should make pupils try to develop their physical strength.

d. teachers must recognize the difference between boys and girls, and from this point, they should choose the most beneficial method of instruction in schools.

1. 研究の動機

この研究は、小学校体育科の運動領域である陸上運動をとりあげ、児童の立場から、教材の好き嫌い、運動の楽しさを体得できているかなどを調査、分析するとともに、合わせて教師の指導認識を調査、分析して児童一人ひとりに楽しさを味わわせることのできる学習計画、指導方法を検討することにある。

陸上運動（陸上競技）は、これまでの様々な角度から、学習内容や指導方法の研究がなされている。

本研究に関係ある先行文献をあげよう。体育授業では、高田^{注1}、竹之下^{注2}、宇土^{注3,4,5}、小原^{注6}、梅野他^{注7}、小林^{注8}などがある。陸上運動（競技）指導では、山本他^{注9}、古藤他^{注10}、金原^{注11}、民内他^{注12}などがある。

さて、筆者は、陸上運動の指導に関する研究（スポーツ教育学研究第4巻第2号）として、これまで陸上運動に対する教師の認識と、児童の認識が一致することが望ましいという立場から実践研究をすすめてきた。その要約は、陸上運動の指導に当って、教師の運動認識や児童の運動認識の深さが、指導上いかに重要であるか、また、陸上運動に対する教師の深い認識を児童に十分伝達し、指導することによって、教師と児童の運動認識を一致させる、その努力過程が、学習効果を高める大きな要因となることを明らかにしている。

さて、本研究は継続研究として、陸上運動の特性を活用しながら、児童が運動に親しむ態度、すなわち、陸上運動の楽しさや、喜びを認識させるための効果的指導方法を検討することである。

児童が陸上運動の楽しさを味わえるように指導するためには、教師が陸上運動の特性を深く認識すること、さらに、児童の体力、運動能力、及び陸上運動に対する好嫌度などを十分把握する必要がある。とくに、陸上運動は、教材が個人中心であるため、児童の運動能力によって個人差が目立つのである。すなわち、自己記録が明確であるため、他人と比較して走ることが速いか、遅いか、高くとべるか、とべないか、上手にハードリングできるか、できないかなどが明らかである。それだけに児童の教材に対する好き嫌いが大きく分か

れるといえる。一方、教師の陸上運動に対する指導認識が不十分であると、児童の陸上運動に対する認識とのくい違いが生じ、その結果、児童の授業に対する不満が多くなると考えられる。

さて、陸上運動の授業研究に、小学校高学年の児童を対象にした理由を述べよう。

この時期、低、中学年に比較して、①運動をある程度、系統的、論理的に行うことができる。②運動を通して、自己の記録向上に満足や喜びを示す。③集団所属への欲求が強くなる。④チームで競走し、勝利への強い欲求を示す。⑤記録測定で、他人に認識されたいという欲求を示す。⑥自己の興味あることに熱中して、自己の能力を伸ばすことに積極的になる。などをあげることができる。

高田^{注13}は、小学校高学年の児童を、「友人に対する純粋さや怒り、組織を守ろうとする強烈な情熱、クラスやチームに対する奉仕や協力など、社会性という立場からいえば、充実期であり、体育学習では、いちばん教えやすい時期である」といっている。このことも対象にした理由の一つである。

さらに、この時期は、身体的発育面で性差が明確になる。とくに、女子は早熟化現象にともない、第二次性徴期に入るため、発育発達が著しい。そのためクラスでは、同一教材に対して、性差を考慮した学習をすすめる必要がある点にも注目し、高学年の児童を対象としたのである。

2. 研究目的

①授業として陸上運動の教材による好き嫌い、及び楽しさについて、児童の立場から、その認識を明らかにする。②陸上運動の指導認識を教師の立場から明らかにする。③児童の陸上運動の教材に対する認識と、教師の陸上運動の認識をふまえて、学習指導を検討する。

3. 研究方法

1) 方法

児童に対しては、質問紙法（一部自由記述形式

を併用)により、陸上運動の教材に対する好き嫌い、教材による楽しさの違いとその理由を調査した。教師に対しては、陸上運動の教材による認識を質問紙法と一部面接法により実施した。なお、陸上運動の授業を数クラス参観し、教師の指導と児童の学習態度を観察、評価して、質問紙による内容を確認、補足した。また、一部の児童に陸上運動の授業に対する自己の努力評価を記入させた。

2) 対 象

- (1) 宗像市及び宗像郡内の小学校3校、5・6年、14クラス男子251名、女子270名、合計521名（うち3クラスは児童の評価も調査）
- (2) 教師は調査対象14クラス14名

3) 時 期

昭和61年9月～11月

4. 結果と考察

1) 児童の陸上運動に対する好き嫌い

児童の陸上運動に対する好き嫌いを論ずる前に、好き嫌いということを明らかにしておこう。

好きとは、理屈ぬきに心が引きつけられる。損得や相手の都合、気持ちなどを考えずに、自分がそうしたいと思う通りにすることと辞書にある。好きとは、人間はもちろんのこと、動植物やその他の物体、また、運動材などにも拡大して使われるようになったのであろう。嫌いということは、好きに対する反対語である。嫌いとは、それを見聞したり、それに接したりするのをいやがるなどである。^{if14}好き嫌いの感情は、①感覚的快感、②幼少の頃からの熟知、③連想、④刺激の存在する全体的場面のよさ、⑤栄養上、または健康上よいことなどの外的、または知的根拠が発見される。しかし、それに対して^{if15}5つの系統の感情的根拠が好き嫌いの心理的要因となっている。児童の好き嫌いも、このような要因のなかから、とらえて認識すべきであろう。走る、とぶ、投げるなどの運動は、人間の基本運動である。それだけに好きなのが普

通であろう。むしろ、嫌いとなる要因が問題になるであろう。好き嫌いの発生機序は、心理的要因のみでなく、指導者、指導法、環境、経験などが複雑に関係している。それだけに、児童の陸上運動に対する好き嫌いは、簡単にとらえることはできないであろう。しかし、推論しながら研究をすすめる。

今回は、陸上運動の教材を中心に、児童の好き嫌いを調べたものである。

2) 児童の陸上運動の教材別による好き嫌い

表1は陸上運動の教材のうちから、短距離走、リレー、走り幅とびの3教材について、好き嫌いを示したものである。

表1 教材別の好き嫌い

項目	性別	男 子	女 子
	好 き	101 (40.2%)	87 (32.3%)
短 距 離 走	嫌 い	69 (27.5)	92 (34.1)
	どちらともいえない	81 (32.3)	91 (33.7)
		男 子	女 子
リ レ ー	好 き	134 (53.4)	126 (46.7)
	嫌 い	52 (20.7)	73 (27.0)
	どちらともいえない	65 (25.9)	71 (26.3)
走り幅とび		男 子	女 子
	好 き	162 (64.5)	141 (52.2)
	嫌 い	34 (13.5)	54 (20.0)
	どちらともいえない	55 (22.0)	75 (28.0)

表1によると、3教材のなかで、走り幅とびを好きというのは、男子64.5%、女子52.2%で最も多い。ついで、リレーを好きというのは、男子53.4%、女子46.7%である。短距離走を好きというのは、男子40.2%、女子32.2%で最も少ない。とくに女子は、短距離走が嫌いというのが34.1%であり、好きを上回っている。3教材共通しているのは、男子の方が女子よりも好きというのが多い。

つぎに、これら3教材を好きな理由、嫌いな理由をあげよう。好きな理由として、短距離走では、①走るのが速いから、②いつも勝っているから、③走ることに興味があるから、が目立って多い。ついで、④走った後気持ちがよいから、⑤距離が短いのでつかれないから、⑥記録がすぐわかるか

ら、⑦みんなとくらべて自分の速さがわかるから、⑧自分の力が一人で出しきれから、などである。

リレーでは、①みんなで協力して走れるから、②団結してやれるからが目立って多い。ついで、③ぬきつぬかれつのスリルがあるから、④遅くても個人的に目立たないから、⑤ゲームみたいにみんながもりあがるから、⑥バトンパスがあるから、⑦最後まで結果がわからないから、⑧いろいろな人と競走できるから、などである。

走り幅とびでは、①遠くへとべるから、②走ってとべるから、③記録がすぐわかるからが目立って多い。ついで、④空中にうくのが気持ちいいから、⑤砂場にとびこめるから、⑥走るよりおもしろいから、⑦走るのにくらべてきつくないから、などである。

以上の結果からいえることは、短距離走と走り幅とびは、個人的に走ったり、とんだりする能力が優れているから好きだというものが多い。一方、リレーでは、個人的能力だけでなく、みんなで協力し合って走ることに魅力を感じているものが多い。

嫌いな理由として、短距離走は、①走るのが遅いから、②いつも負けているから、③走り方がおかしくて、はずかしいから、が多く以下、④記録がのびないから、⑤競走するのがいやだから、⑥きつくて、つかれるから、などである。

リレーでは、①走るのが遅いから、②いつもぬかれてみんなに迷惑をかけるから、が多く以下、③責任が重いから、④他人から文句をいわれるから、⑤自分のはやくてもチームの他の人が遅くて負けるから、⑥きつくて、つかれるから、⑦いつも同じ順番でしか走らないから、などである。

走り幅とびは、①遠くにとべないから、②とぶのが下手だから、③ジャンプ力がない、が多く、以下、④とび方がわからない、⑤体重が重いから、⑥とび方がおかしいとみんなに笑われるから、⑦失敗したら痛くて、こわいから、などである。

以上3教材の嫌いな理由は、好きな理由の逆となっているようである。すなわち、好きと嫌いは表裏一体であることがわかる。とくに、個人の運動能力の優劣がそのまま好き嫌いに直結していることが多い。好きなものを、もっと好きになるよ

うに指導することは大切である。一方、嫌いなものをどのように指導するかは、より重要な課題であると考えられる。

また、個人的に運動能力が劣っていても、個人的技術や対人的技術の指導によって、嫌いな教材をより少なくさせる方法があるであろう。陸上運動の発展過程からいえば、日常生活のなかで、だれもができる運動であるから、元来好き嫌いはいはずであると考えられる。そのことを児童に認識させる必要がある。しかし、走る、とぶなどの能力は、個人の素質の大きさなので、記録中心の指導には問題がある。

そこで、陸上運動には個人だけで身につけ完成することができる記録中心の個人的競技性と、お互い競走(争)させて記録向上をはかる集団的競技性があることを児童に認識させる。この両者をミックスしながら教師が指導することは、嫌いな児童にとって大切な指導であるといえよう。短距離走や走り幅とびなどが嫌いな児童は、クラスのなかで相互に競わせることよりも、むしろ、自己の努力によって最高能力を発揮させることに指導のポイントをおくべきであろう。また、走ることの遅い児童には、ももあげ、腕ふり、などの技術的指導や、一定の距離間の走法を指導する。すなわち、スタートから中間走、ゴールへのフィニッシュにいたるまでの走法指導により、従来よりも速く走れるようになった例は少なくない。また、走り幅とびでは、踏み切ってジャンプする部分の指導にポイントをおくだけで、記録が向上した例がけっこう多いのである。

リレーは、陸上運動でチームゲームの要素をもつ教材である。リレーは、個人の走能力と、メンバーの総能力、すなわち、個人の走能力はもちろんであるが、バトンパスの技術がチーム成績やチームの記録向上に直結するのである。バトンゾーンのなかで、速いスピードで上手にバトンを渡す技術は、指導のポイントである。基本的には、チーム編成(性別や男女混合の場合がある)に際して、チームの走能力を記録的に均等にすると、そのうえで、チームを競わせること、また、勝敗の不確定要素をもたせるために速いチームと遅いチームにハンディキャップをつけること、などが

指導上必要である。

以上、児童の陸上運動に対する教材別による好き嫌いの認識を分析、考察し、それに対応する指導方法にふれたのである。

3) 児童の陸上運動における楽しさ

楽しさについて考察しておこう。楽しさは、満足な状態が続いて、何も不平や心配のない様子や、うれしい状態が続く感じ、好きなことをする。そのものものつよさもしみじみ味わうなどと辞書にある。楽しさと共通するのは、嬉しさ、喜び、愉快、満足などである。ところで楽しさは、単なる快楽性、娯楽性でなく、苦しさのをり越えてこそ、本来の楽しさがある。体育授業での楽しさは、遊戯的なものだけでなく、本来の楽しさも十分考慮する必要がある。さて、好き嫌いとしとの関係を明らかにしておこう。学習場面での組み合わせは、①好きであり、楽しい場合が最も多い、しかし、②好きでも楽しくない、③嫌いでも楽しい場合もある。最も楽しくないのは、④嫌いで楽しくない場合である。

ところで、小学校体育科の目標（文部省昭和55年度実施）には、「適切な運動の経験を通して、運動に親しませる」とある。このことは、陸上運動の経験、実践を通して、児童に陸上運動の楽しさを十分に味わわせ、日常生活はもちろん、生涯を通じて児童が自ら進んで積極的に、陸上運動を実践できることである。陸上運動の楽しさを、児童一人ひとりのものにさせ、楽しさを体得させるのは、教師の指導力によるものが大きい。

もともと、陸上運動をスポーツとしてとらえると、遊戯性があり、自由で楽しいものである。しかし、学校教育の一分野としての体育授業では、教材の選択はもとより、時間的、空間的に児童は制約され、拘束される。それだけに、スポーツのもつ、自由性、娯楽性、解放性などを十分体得しにくいであろう。このような条件のなかで、教師は児童に楽しい運動体験をさせるためには、陸上運動に対する指導認識を深める必要があろう。

4) 児童の陸上運動の授業中における楽しさ

表2は、教材別により児童が授業中に楽しさを

表2 教材別の楽しさ（授業中に楽しさを感じた経験）

項目	性別	男 子	女 子
短 距 離 走	楽 し い	195(77.7%)	203(75.2%)
	楽 し く ない	56(22.3)	67(24.8)
リ レ ー	男 子		女 子
	楽 し い	207(82.5)	224(83.0)
	楽 し く ない	44(17.5)	46(17.0)
走り幅とび	男 子		女 子
	楽 し い	222(88.4)	212(78.5)
	楽 し く ない	29(11.6)	58(21.5)

感じたことの有無を表したものである。

表2によると、楽しさを感じたものは、男子では走り幅とびが88.4%と最も多く、ついで、リレー82.5%、短距離走77.7%である。女子はリレーの83.0%が最も多く、ついで、走り幅とび78.5%、短距離走75.2%である。

一方、授業中に楽しさを感じていないものは、短距離走の女子24.8%、男子22.3%が最も多く、ついで走り幅とびの女子21.5%である。リレーは男女とも17%台、走り幅とびの男子11.6%が最も少ない。3教材を通して、走り幅とびに性差がやや目立つが、他の2つの教材には性差がないといえる。

教材別に楽しさの理由をみてみよう。

図1によると、短距離走では、①練習して記録

図1 楽しい理由（重答）（短距離走）

がのびたから (男子80.5%, 女子67.0%), ②競走で相手に勝てたから (男子66.2%, 女子59.1%), ③友だちとなかよく運動できたから (男子36.9%, 女子49.3%), ④力いっぱい運動することができたから (男子38.5%, 女子46.3%), ⑤友だちや教師からほめられたり, はげまされたりしたから (男子23.1%, 女子37.4%), ⑥記録だけにこだわらず, 努力を認めてもらえたから (男子25.6%, 女子24.1%), となっている。ところで, 友だちや教師から熱心に教えてもらったとき, 友だちや教師から, ほめられたり, はげまされたから, を合計すると, 男子35.4%, 女子49.7%となり, 教師や友だちの指導や激励, 賞賛などが楽しい要因になっている。以上をまとめると, 短距離走では, 練習して記録を向上させたい, 競走で勝ちたいという認識のもとに運動し, それが達成されたときに大きな楽しみや喜びを感じているといえよう。

図2によると, リレーでは, ①自分のチームが勝てたから (男子85.5%, 女子79.5%), が断然多い。ついで, ②チーム全員が協力できたから (男子47.8%, 女子65.2%), ③力いっぱい運動することができたから (男子32.4%, 女子42.9%), ④自分のチームを力いっぱい応援できたから (男子23.7%, 女子43.8%), ⑤遅くてもチームのみ

んなから努力していることを認められたから (男子27.1%, 女子37.9%), ⑥自分たちで作戦をたてることができたから (男子23.7%, 女子21.0%), ⑦教師や友だちからほめられたり, はげまされたから (男子22.7%, 女子32.6%) である。

リレーでは, チームで協力して練習し, 応援し, それが勝利に直結した場合に楽しさを感じているといえる。

図3によると, 走り幅とびは, ①よい記録をだすことができたから (男子73.9%, 女子67.5%), ②練習して記録がのびたときが断然多い。ついで, ③助走や踏み切りが上手にできたから (男子48.6%, 女子35.8%), ④友だちとなかよく運動できたから (男子28.8%, 女子47.6%), ⑤力いっぱい運動することができたから (男子32.4%, 女子43.4%), ⑥記録だけにこだわらず努力を認めてもらえたから (男子19.4%, 女子24.1%), ⑦自由に練習することができたから (男子23.0%, 女子19.8%) である。

ところで, 友だちや教師からほめられたり, はげまされたからや, 友だちや教師から熱心に教えてもらったから, を合計すると, 男子26.1%, 女子34.1%になる。

走り幅とびは, 助走や踏み切りの練習をしてよ

い記録をだしたから、楽しさを感じているといえる。

以上、3教材共通しているのは、競走（争）で個人あるいは、チームが勝つことができたから、よい記録がだせたからなど、陸上運動の教材特性に関連している。すなわち、陸上運動の特性にふれることにより、楽しさを感じていると考えられる。しかし、陸上運動の特性を引きだすのは、児童をとりまくクラスの雰囲気や交友関係、教師の指導助言、指示、受容、賞賛、激励などが要因となっている。

つぎに、3教材共通して授業中の楽しさを性差でみると、男子は、先に述べた陸上運動の特性に関連したものが、いずれも女子を上回っている。すなわち、男子は女子より競走（争）性、勝利性、記録向上などに楽しさを希求している。一方、女子は男子に比較して、どの運動にもみられる一般的な楽しさに関するものが上回っている。すなわち、男子よりも女子の方が運動する楽しさ、激励、賞賛される楽しさ、協力する楽しさなどを希求しているといえる。

さて、教材別に楽しくない理由を述べよう。

図4によると、短距離走は、①走るのが遅いから

ら（男子58.9%，女子71.6%），②いつも競走で負けてばかりいるから（男子41.1%，女子25.4%），③練習しても記録がのびないから（男子30.4%，女子34.3%），④競走ばかりするから（男子23.2%，女子19.4%）の順である。このことは、走ることが遅いので記録が悪く、また競走に負けるからということである。

図5によると、リレーでは、①走るのが遅いから（男子61.4%，女子69.6%），②いつも負けて責任を押しつけられるから（男子25.0%，女子15.2%），③いつも自分のチームが負けてばかりいるから（男子22.7%，女子15.2%）の順である。リレーの場合も楽しくない大きな理由は、走ることが遅いことにある。そのためにチームの一員として責任の重さを感じているといえる。

図6によると、走り幅とびは、①よい記録をだすことができないから（男子69.0%，女子72.4%），②助走や踏み切りが上手にできないから（男子34.5%，女子43.1%），③練習しても記録がのびないから（男子27.6%，女子41.4%）の順である。走り幅とびでも、楽しくない理由として多いのは、記録がよくないことである。

図6 楽しくない理由(重答) (走り幅とび)

以上、3教材について、楽しくない理由を明らかにした。共通する理由は、①走るのが遅いから、②記録がよくないから、③他人に負けるから、といった個人の運動能力に関連したものが多い。陸上運動の特性である競走(争)性は、楽しさの要因である。しかし、時間や記録の競走(争)で勝つことがほとんどない児童は勝利経験がなく、競走(争)的意欲を喪失するであろう。走る、とぶの運動能力が劣る児童、練習しても記録がのびない児童にも勝利経験を味わわせることが必要であろう。例えば、リレーのメンバーに組み入れるのも一方法である。

つぎに、①力いっぱい運動できないから、②競走(争)ばかりするから、③記録にこだわりすぎるから、といった理由は、教師の授業の進め方、すなわち、教師の指導力不足に対する児童の不満を示したものと見える。競走(争)や記録にこだわる授業や、説明が多くて運動量の確保がされない授業、叱責が多く、激励や賞賛の少ない授業などを経験し、楽しくないと感じた児童が多いと思われる。児童の一人ひとりが楽しく感じる授業を進めるには、陸上運動の特性、技術の習得が中核になる。そのうえ、教師から与えられた学習課題を児

童たち自らの創意工夫により内面化するように指導すべきであろう。好きな児童、嫌いな児童も対等に、優劣を越えて楽しみや喜びを味わわせることが大切である。

5) 児童の陸上運動の教材に対する好き嫌い と楽しさの関係

先に、児童の陸上運動の教材に対する好き嫌いを明らかにした。その調査結果を、児童の陸上運動の授業中における楽しさの調査と合わせて集計したのが図7である。

図7 好き嫌いとしさの関係(短距離走)

図7によると、短距離走では、男女とも好きと答えたもののほとんどが楽しいと感じている。また、どちらともいえないと答えたものは、男子81.5%、女子83.5%が楽しいと感じている。ところが、嫌いと答えたもののなかで、楽しさを感じたのは、男子44.5%、女子45.7%である。

図8によると、リレーでは、男女とも好きと答えたもののほとんどが楽しいと感じている。また、

図8 好き嫌いとしさの関係(リレー)

どちらともいえないと答えたものは、男子84.6%、女子87.3%が楽しいと感じている。ところが、嫌いと答えたもののなかで楽しさを感じたのは、男子36.5%、女子49.3%である。

図9によると、走り幅とびでは、男女とも好きと答えたもののほとんどが楽しさを感じている。また、どちらともいえないと答えたものは、男子81.8%、女子77.3%が楽しさを感じている。ところが、嫌いと答えたもののなかで、楽しさを感じたのは、男子50.0%、女子27.8%である。

3教材共通していえるのは、好きなもの及び、どちらでもないと答えたもののほとんどが楽しさを感じたことがあるとっている。しかし、嫌いと答えたものの半数以上は楽しさを感じたことがないといっていることである。嫌いで、楽しくない児童の指導は重要であり、今後の研究課題である。さて、陸上運動は好きだから楽しいということがいえそうである。しかし、嫌いだから楽しくないということは、必ずしもいえない。陸上運動が嫌いといっている児童のなかには、授業中何らかの楽しさを感じ、いっしょうけんめい学習に取り組んでいるものが多くいることを教師は認識すべきであろう。この児童たちは、陸上運動の好きなものに比較して、運動能力が劣り、練習しても記録ののびが少ないようである。そのため、運動することよりも、むしろ授業中、友だちとなかよくしたり、友だちを応援したりすることに楽しさを感じているようである。この児童たちを教師がどの

ように指導するかによって、クラス全体の雰囲気も変容するであろう。陸上運動の好きな児童だけに焦点をおくのではなく、嫌いな児童にもきめこまかな指導助言を忘れてはならない。

6) 児童の陸上運動の授業に対する努力評価
児童が陸上運動の授業に対して、どのように努力したか、その内容を自己評価させた。

対象は6年4クラス、148名(男子75名、女子73名)である。なお、この評価は、10月の授業で実施した陸上運動(短距離走3時間、走り幅とび3時間、リレー2時間、計8時間)に対してである。

表3は、その結果を示したものである。この表によると、男子は、自己の記録を向上させる、競走(争)に勝つ、が多い。女子はみんなで協力して

表3 児童の陸上運動の授業に対する努力評価(重答)

項目	性別	男子(%)	女子(%)
1 自己の記録を向上させる		40(53.3)	19(26.0)
2 きれいなフォームを身につける		10(13.3)	24(32.9)
3 競走(争)に勝つ		38(50.6)	20(27.4)
4 記録や計測のしかたを身につける		6(0.8)	7(9.6)
5 体力をつける		10(13.3)	11(15.1)
6 運動の方法を身につける		5(6.7)	6(8.2)
7 運動の楽しさを味わう		25(33.3)	34(46.6)
8 みんなで協力して練習する		18(24.0)	36(49.3)
9 力いっぱい活動する		21(28.0)	15(20.5)

(男子 75)
(女子 73)

練習する、運動の楽しさを味わう、が多い。このことからいえるのは、児童の努力評価には、性差がみられる。すなわち、男子は、競走(争)的であり、記録向上をはかるものが多いのに対して、女子は、運動による快楽性や、仲間との協力関係が多い。陸上運動の授業から推察すると、性別により、努力評価の認識が違う。このことは男女同一クラス単位の授業から性別単位の授業にきりかえる必要があろう。また、現状では教師は、性差を十分配慮した指導方法をとることが必要があることを、示唆している。

表4 教師の指導認識（5点満点）

項目 \ 人員	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	平均
1. 自己の記録を向上させる	4	5	5	4	4	5	3	4	4	5	5	5	5	5	4.50
2. きれいなフォームを身につけさせる	4	4	4	4	3	4	4	3	4	3	4	3	5	5	3.86
3. 競走(争)に勝てるようにさせる	4	3	2	1	3	3	4	3	3	1	2	2	4	4	2.79
4. 記録や計測のしかたを身につけさせる	2	3	3	3	4	3	2	3	3	3	2	3	4	4	3.00
5. 体力をつけさせる	5	4	3	4	5	5	5	4	5	5	5	4	5	5	4.57
6. 運動の方法を身につけさせる	4	4	4	4	4	5	4	3	4	4	2	3	4	5	3.86
7. 運動の楽しさを味わわせる	4	5	5	5	5	5	3	5	5	4	4	4	4	5	4.50
8. みんなで協力して練習させる	3	4	5	5	4	5	4	4	5	4	3	5	5	5	4.36
9. 力いっぱい活動させる	4	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4.71

7) 教師からみた陸上運動の指導認識

表4は、教師が陸上運動を指導する際に重視する項目を5段階で評価してもらったものである。この表によると、評価点が高いのは、①力いっぱい活動させる（平均4.71点）、②体力をつけさせる（平均4.57点）、③運動の楽しさを味わわせる（平均4.50点）、③自己の記録を向上させる（平均4.50点）、⑤みんなで協力して練習させる（平均4.36点）である。逆に評価点が低いのは、①競走(争)に勝てるようにさせる（平均2.79）、②記録や計測のしかたを身につけさせる（平均3.00点）、③きれいなフォームを身につけさせる（平均3.86点）、③運動の方法を身につけさせる（平均3.86点）である。

以上のことから、教師は陸上運動の指導に際し、児童一人ひとりに、力いっぱい活動させて、体力をつけさせるとともに、記録の向上をはかることを認識し、指導、助言しているといえる。その結果、児童に陸上運動の楽しさを味わわせる指導をこころがけていると考えられる。

つぎに、教師からみた児童の陸上運動の授業における楽しさの認識を明らかにしよう。

短距離走では、最も多かったのが、①自己の記録を向上する楽しさである。ついで、②力いっぱい活動する楽しさ、③競走(争)に勝つ楽しさである。

リレーでは、最も多かったのが、①チームで協力して競走(争)する楽しさである。ついで、②バトンパスが上達する楽しさ、③チームを応援する楽しさである。

走り幅とびでは、最も多いのが、自己の記録を向上する楽しさである。

8) 児童と教師の陸上運動の授業に対する認識の分析と指導法

児童が陸上運動の授業中に、楽しさを感じる内容、及び児童が陸上運動の授業に対する評価と、教師の陸上運動の授業に対する指導認識の内容を分析し、児童と教師の認識が一致する内容と、不一致の内容をあげよう。

一致する内容は、男子では、自己の記録を向上させる。女子は、運動の楽しさを味わう（あわせる）。みんなで協力して練習する（させる）である。

一方、不一致の内容は、力いっぱい活動する（させる）、体力をつける（つけさせる）、競走(争)に勝つようにする（させる）、記録や計測のしかたを身につける（させる）、きれいなフォームを身につける（させる）、運動の方法を身につける（させる）などである。

不一致の一因は、教師の指導力不足である。

さて、児童と教師の陸上運動の認識が、一致することは、学習効果をたかめる要因であること

を研究仮説とした。そこで、児童と教師の認識が一致した内容を見ると、性差があり、男女によって認識がくいちがっている。現状では、クラス単位の授業の場合、男女混合が普通であるから、男女それぞれの認識や欲求に応じた指導を、教師はする必要がある。そのことは、教師とクラス全員（男女）の運動認識を一致させることに結びつくのである。

一方、児童と教師の運動認識の不一致を、少なくする方法は、運動認識のくいちがいをなくすか、また、少なくすることである。そのためには、教師は児童の陸上運動の認識を十分ふまえたうえで、まず、性差を配慮しての運動特性を引きだし、指導する。ほぼ平行して、力いっぱい活動をさせる。そのことが、結果として体力づくりになるといえる。

要 約

1) 授業としての陸上運動の教材による好き嫌い、及び楽しさについて、児童の認識を明らかにするとつぎのことがいえる。

① 陸上運動の教材による好き嫌いをみると、教材別、性別により、好き嫌いに差異があるようである。すなわち、男女とも走り幅とびが好き（男子64.5%、女子52.2%）が最も多く、ついで、リレーが好きは男子53.4%、女子46.7%、短距離走が好きは男子40.2%、女子32.2%と最も少ない。とくに、短距離走が嫌いという女子は34.1%であり、好きを上回っている。

② 陸上運動の好きな理由は、短距離走では、走るのが速いから、いつも勝っているからが多い。リレーは、みんなで協力し団結して走れるからが多い。走り幅とびは、遠くへとべるから、走ってとべるから、記録がすぐわかるからなどが多い。

一方、嫌いな理由は、短距離走では走るのが遅いから、いつも負けているからが多い。リレーは、走るのが遅いから、いつもみんなに迷惑をかけるからが多い。また、走り幅とびは、遠くへとべないから、とぶのが下手だからが多い。

3教材共通していえるのは、好きな理由と嫌いな理由は表裏一体になっているようである。とくに、

個人の走る、とぶなどの運動能力の優劣がそのまま好き嫌いに直結していることが多い。リレーは、個人的競技性だけでなく、集団としての協力性、競技性が好きな条件となっている。

③ 陸上運動の楽しさを教材別にみると、授業中に楽しさを感じたものは、男子では走り幅とびが88.4%と最も多く、ついで、リレー82.5%、短距離走77.7%である。女子は、リレーの83.0%が最も多く、ついで、走り幅とび78.5%、短距離走75.2%である。3教材のなかで、走り幅とびに性差がみられるようである。

④ 陸上運動の楽しい理由を教材別にみると、短距離走では、練習して記録がのびたから、競走で相手に勝てたからなどが男女とも多い。すなわち、児童は、練習して記録を向上させたい、また、競走(争)で勝ちたいという認識のもとに運動し、それが達成されたときに楽しみを感じている。

リレーは、自分のチームが勝ったから、チーム全員が協力できたからなどが男女とも多い。すなわち、チームで協力して練習し、応援し、それが勝利に直結した場合に楽しいといっている。

走り幅とびは、よい記録をだすことができたから、助走や踏み切りの練習をして記録がのびたからなどが男女とも多い。

3教材共通しているのは、陸上運動の教材特性にふれることにより、楽しさを感じている。しかし、陸上運動の特性を引き出すのは、児童をとりまくクラスの雰囲気や交友関係、教師の助言、指示、受容、賞賛、などが要因となっている。

一方、楽しくない理由は、短距離走では、走るのが遅いから、いつも競走で負けてばかりいるからが男女とも多い。リレーでは、走るのが遅いから、いつも負けてチームの責任を押しつけられるからが男女とも多い。走り幅とびでは、よい記録をだすことができないから、助走や踏み切りが上手にできないからが男女とも多い。

3教材に共通する理由は、先に述べた嫌いな理由と関連している。

⑤ 陸上運動の好き嫌いと楽しさとの関係をみると、3教材共通していることは、男女とも好きと答えたもの及びどちらでもないと答えたもののほとんどが、楽しさを感じている。

一方、嫌いと言ったものでも、男女の約半数が楽しさを感じている。すなわち、好きだから楽しい場合が多い。しかし、嫌いだから楽しくないとは必ずしもいえない。嫌いな児童のなかには、楽しさを求めて学習に取り組んでいるものもけっこう多いのである。

2) 陸上運動の指導認識について、教師の立場から明らかにするとつぎのようなことがいえる。

① 教師が陸上運動を指導する際に重視する項目は、i 力いっぱい活動させる、ii 体力をつけさせる、iii 運動の楽しさを味わわせる、iv 自己の記録を向上させる、v みんなで協力して練習させる、の順である。逆に評価点が低いのは、i 競走(争)に勝てるようにさせる、ii 記録や計測のしかたを身につけさせる、iii きれいなフォームを身につけさせる、などである。このことから、教師は陸上運動の指導にあたり、児童に、力いっぱい活動させて、体力をつけさせる。また、記録の向上をはかることを重点的に認識し、指導し、助言している。

② 教師は児童の陸上運動の授業における楽しさについて、短距離走と走り幅とびでは、自己の記録を向上する楽しさが最も多いと認識している。また、リレーでは、チームで協力して競走(争)する楽しさをあげている。

3) 児童と教師の陸上運動に対する認識の分析と指導法について

① 陸上運動の授業中における楽しさを感じる内容を、児童は、i 練習して記録をのばす、ii 競走で勝つ、iii チームで協力する、を多くあげている。しかし、教師の指導認識では、i 力いっぱい活動させる、ii 体力をつけさせる、に主眼がおかれ、i 運動の楽しさを味わわせる、ii 自己の記録を向上させる、iii 競走に勝つ、などは相対的に評価が低い。すなわち、児童は陸上運動の特性にふれることに楽しさを感じている。しかし、教師は陸上運動の教材を通し、運動の特性を引きだす指導よりも、むしろ、力いっぱい活動させる。体力をつけさせることに重点をおいている。

4) 児童と教師の陸上運動の認識をふまえて、学習指導方法を検討すると、つぎのことがいえる。

① 陸上運動を児童はスポーツとして認識して

いるようである。しかし、教師はあくまで体育の一教材としてとらえている。そのため、陸上運動の特性を引きだし、そのなかで楽しさを味わいたいと思う児童との間に認識の不一致がみられる。このことをなくすためには、教師は、まず、陸上運動の特性を引きだし、そのなかで、児童に楽しみの経験を配慮させる。そのうえで、教師の指導目標とする、力いっぱい運動させ、体力をつけさせることを導入していく必要がある。

② 陸上運動は、個人の体力や運動能力がそのまま記録や順位として客観的に評価される。また、ゲームにくらべて、単調な運動のくりかえしであるため、児童の興味や関心をひきつけにくい。とくに、走る、とぶなどの能力に劣る児童には、嫌われがちである。また、小学校高学年では、性差が明確になる。とくに、女子は不器用になりがちなために、陸上運動を嫌う児童が増加する傾向がある。したがって、性差を配慮しながら、陸上運動の特性を経験させる。また、同一クラスのなかで男女いっしょの授業では、個人の記録ののび方を重視するとともに、リレーでは、男女混合や、遅い児童と速い児童とのミックスによるチームづくりによって、勝敗の未確定性を考慮してやる必要がある。遅い児童や上手にとべない児童にも競走(争)意欲をもたせ勝利の経験を味わわせる指導をすべきである。

⑤ 児童に陸上運動の楽しみを経験させるためには、陸上運動の特性を引きだす誘因となる、児童の交友関係や、クラスの雰囲気、教師の指導助言、指示、受容、賞賛、激励などが重要なポイントと考えられる。

今後の課題

学習場面での、好き嫌い、楽しさの問題は、心理学でも未解明である。また、この問題は、単に心理学のみでなく、生理学、教育学、哲学などが関連する。今後の研究課題である。

なお、この研究は河合辰男の協力によるものである。

引用・参考文献

- 注1) 高田典衛 子どものための体育科教育法
P121, 129 大修館書店 1967
- 注2) 竹之下休蔵 体育科学習指導の研究
P133~136 光文書院 1975
- 注3) 宇土正彦 体育の教材研究 P2~7 大
修館書店 1979
- 注4) 宇土正彦 体育科教育法入門 P201~202
- 注5) 宇土正彦 体育授業の系譜と展望 P36
大修館書店 1986
- 注6) 小原晃他 体育授業における個別化学習過
程の成立要因に関する研究 スポーツ教育
学研究第4巻第2号 P31 日本スポーツ教
育学会 1985
- 注7) 梅野圭史他 体育科の授業分析~教授活動
の相違が児童の態度に及ぼす影響~スポー
ツ教育学研究 第6巻第2号 P1 日本ス
ポーツ教育学会 1985
- 注8) 小林篤 体育授業の原理と実践 P9 杏林
書店 1986
他に、授業分析法入門(明治図書) 体育
の授業(一荃書房) 体育授業研究, 体育
の授業分析(大修館書店) 小学校の体育
(有斐閣)
- 注9) 山本邦夫他 陸上競技の指導 P23~32 道
和書院 1971
- 注10) 古藤高良編 陸上競技指導ハンドブック
P9~13 大修館書店 1975
- 注11) 金原 勇 陸上競技のコーチング 大修館
書店 1975
- 注12) 民内利昭他 陸上競技の効果的指導の研究
体育学研究第30巻第4号 p341 1985 (日
本体育学会第36回大会研究発表)

- 注13) 前掲書1) P129
- 注14) 下中邦彦編 心理学事典 P106 平凡社
1967
- 注15) 前掲書14) P106
①つめたくなく温か味があること、さびし
くなく、にぎやかなこと、②自然であり素
直であること、あまりあくどくなく淡白な
こと、③やさし味があり、また可憐であり、
可愛いこと、④生き生きして、元気がある
こと、またしっかりしていること、⑤汚く
なく、清潔なこと、純粹であり、またすが
すがしいこと、野卑でなく気品が高い、優
美であること、落ちつき、また渋味・奥床
しさなど、以上の5系統である。
- 注16) 文部省 小学校指導書 体育編 P6 東
山書房 1980
- 17) 秋吉嘉範 陸上競技選手のランニング・
フォームに関する研究(1), 福岡教育大学紀
要第25号, 1976
- 18) 秋吉嘉範 陸上競技指導の基礎的研究, 福
岡教育大学紀要第26号, 1977
- 19) 秋吉嘉範 陸上競技における規範の諸問題
(その2), 福岡教育大学紀要第26号,
1977
- 20) 秋吉嘉範他 運動の概念, 不昧堂出版,
1984
- 21) 秋吉嘉範 陸上競技選手のランニング・
フォームに関する研究(3), 福岡教育大学紀
要第34号, 1985
- 22) 秋吉嘉範 運動の価値と認識に関する研究,
福岡教育大学紀要第34号, 1985
- 23) 秋吉嘉範 陸上競技の哲学的研究, 体育・
スポーツ哲学研究第8巻, 1986